

里山グループ

池田 信明

◆今夏の猛暑と里山、公園への影響を思う。

今年の夏は例年に比べ、異常な猛暑で人間だけでなく里山や公園の草木にとっても今年はずいぶん夏になったのではないのでしょうか。

ならやまの里山と奈良公園では草木の生育環境がだいぶ違いますので比較は難しいのですが、私は飛火野の植生が好きなので季節ごとにぶらりと観察に行くことがあります。奈良公園で目立つ樹種は外来種の「ナンキンハゼ・ナギ」や在来種の「イチイガシ」が見られます。イチイガシは春日大社が創建された8世紀頃には御蓋山から飛火野辺りまでイチイガシの照葉樹林が広がっていたといわれております。

春日大社境内には幹周3m以上の巨樹といわれる23本のイチイガシが、昭和56年2月に奈良市の天然記念物に指定されており、毎年たくさんのドングリをつけます。イチイガシのドングリは鹿も好きですし、渋味も少なく人も食べることができますが、そのドングリの成長が今年はずいぶん遅く7~8月になっても大きくなり、猛暑と雨不足によるものと推測しています。飛火野辺りは特に他の樹木も少なく猛暑による土地の乾燥で、水不足になっていたのかも知れません。9月に入り台風や雨量も多くなりドングリの成長は元に戻りつつあるように見えますが、台風で落下したドングリを見ると粒が小さく、今の季節を考えると今夏の猛暑が大きく影響しているように見えます。今回は公園で良く目立ち観察しやすいイチイガシを取り上げましたが、他の種類のドングリでも影響はあると思います。

今、世界で心配されている地球温暖化が原因と言われている地球レベルのさまざまな気象変動が、これからますます激しくなる事が予想されており、自然環境の小さな変化の積み重ねにより取り返しのつかないような事態が、目の前まで迫っているように思えてなりません。



エコファームグループ

三瀬 英信

◆秋のならやまの野菜畑

「今年は災害の多い年でしたね！」と振り返るのも間もなくとなった。4月の島根県西部地震。6月の大阪北部震度6弱の地震。7月には西日本を襲った豪雨災害。7月半ばからの歴史的な猛暑は30年にして1度のこと。「命にかかわる危険な暑さ」と気象予報士の耳慣れない解説が日常的に聞こえるほどだった。「災害は忘れたところにやって来る」といわれるが、ある人いわく、「今年の災害は忘れる前にやって来る」と。

ならやまは、台風による倒木の片付けが続いているが、その他は大きな被害を免れた。災害の影響は経済指標にも表れた。自然が相手の農作物は特に大きな被害をもたらす野菜が高騰した。

たとえ猛暑であっても種をまかねば実りはない。毎日のように水をやり、まばらな発芽には追いかけて種をまき、虫よけ網をかぶせ、除草にと手をかけたかいあって、今のならやまの畑は野菜で緑

に染まっている。その種類はざっと20種以上。(唐辛子、ナバナ、大根《紅心、

聖護院、YRくらま、わさび、桜島、スワン》、ネギ、玉ネギ、白菜、キクナ、ほうれん草、日野菜、ワケギ、ニンニク、玉ネギ、水菜、落花生、春菊、レタス、ニラ、さつまいも、里芋、秋ナスなど)

この陰には、収穫の後片付け、畑づくり、苗づくり、堆肥づくりと地道な仕事あつてのこと。萱野リーダーの“手を抜いたらあかんでえ”の言葉が聞こえてくる。萱野さんが一日も早く復帰できるよう祈っている。

間もなく“ほのぼの市場”にエコメンバーの汗と自然の恵みが育んだ野菜類が並び、“今から販売をはじめま〜す”と吉村さん(販売部長)の声が響くだろう。乞ご期待!!



景観グループ

永井 幸次

◆バカマツタケ栽培

ならやまの松林で松茸の人工栽培をやっているとき、新聞に奈良県森林技術センターがバカマツタケの人工栽培に成功したと載っていた。松茸のことも興味があるとき、近大農学部で奈良県森林技術センターの河合昌孝さんの菌根性キノコの栽培の講演があり、福田さんと聴きに行ってきた。

キノコの繁殖の仕方にはシイタケ、なめ茸のように腐生性とマツタケのように菌根性がありバカマツタケも菌根性です。培養した菌糸体を直接林地に埋める方法でなく、取り木苗とともに培養した菌糸体などを林地に埋めた方法で行い、2年続けて成功したとのことです。



バカマツタケ学名 *Tricholoma bakamatsutake*

バカマツタケはハラタケ目キシメジ科のキノコ、マツタケに酷似するが、松林ではなく雑木林に生きることや、やや発生時期も早いので馬鹿なマツタケということの名がついた。

発生時期：8～11月。発生場所；クヌギ、コナラ、赤松などの雑木林の地上に点々と生える。マツタケとよく似ているが、やや小形。傘の直径5～10cm、表面は繊維状でささくれている明褐色、周辺部は薄茶色か淡黄色、柄も同色同形で長さ4～10cm、肉は白色で締まっている。

マツタケとは生える林が違うので判別できるが、いっしょの籠に盛られたら初心者には見分けがつかないだろう。ましてや料理として出されたら経験者でもむずかしい。それほどに形、色、味、香りともにそっくりで、むしろ発生数の少ないことからキノコ通の間では珍重されている。

ならやまでバカマツタケが採取できるように早く取り組みたいものです。

里山の今



鳥シリーズ

小田 久美子

◆ 鳥・梟・鳶

臼田甚五郎著『民俗文学へいざなひ 鳥と蟹とをめぐって』を読みました。著者は、昭和40年代に日本全国(南は沖縄迄)を巡り、民衆の暮らしぶりや、昔話・俗信・伝承を掘り起こしています。鳥と梟の話はあちこちに伝承がありますが、(地名は多いので省きます。)その分布は近畿地方以東に片よっていて、中国・四国・九州にはほとんどないとして、西津軽郡鰹ヶ沢町鬼袋の例をあげています。{昔、梟は紺屋(染物屋)でした。おしやれ者鳥は、自分の白い羽が気に入らず、梟の所へ染めて貰いに行きました。「ふくろア、汝のようだ色コネそめでけれジャ」と頼んだのですが、どうしたことか、梟は、鳥を真っ黒に染めてしまいました。それで、鳥は今でも怨みに思い、梟を見つけると突きまわすのです。}…この話は、私も鳥シリーズで2012年「カラスとフクロウ」の話を書きましたが、他に、東北や長野の町村にもあるようです。他に、紺屋を鳶、客を鳥とする話は、東北各地や津和野などにもあり、はるか西に飛んで壱岐島武生水村では、鳥が紺屋、鳶が客で、真っ白だった鳶が鳥に染めて貰ったが、気に入らず染代を払わないので、鳥は怒って仲が悪くなったという話もありました。(地名は旧地名です)

古代文学にも鳥を詠んだ歌がありました。
『万葉集』

3521-鳥とふ 大をそ鳥のまさでも来まさぬ君をころくとそ鳴く

訳：鳥という とんま鳥めが 実際には来ない君なのころく(自分から来る)と鳴く—(男を待つ歌)

3522-昨夜こそば 児ろとさ寝しか雲の上ゆ鳴き行く鶴のま遠く思ほゆ

訳：ゆうべこそ あの娘と寝たのに 雲の上を鳴き行く鶴のように 遙かに思える—(女を思う歌)

『日本霊異記』- 鳥といふ大をそ鳥の言をのみ共にと言ひて先立ち去ぬる

訳：鳥という とんま鳥めの言うことを信じたが 共にと言ったのに先に飛んで行った